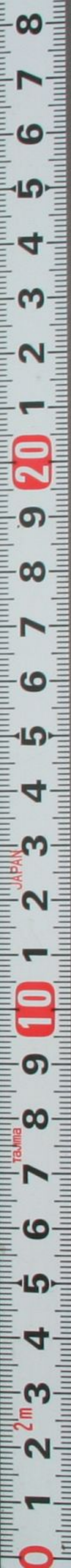


惜陰書錄

三

昭和八年四月上浣起筆

特別
14
1919
451



176716

惜陰老書三

昭和八年四月以降

○余一息縁の文守の学徳をまがふ、前年初方の海峽を
 得今も改稿す、此考甚に稀歟、属す、書守和方
 の詩を存す、朗誦に値するもの多し、蓋し緋珠の詩
 人と謂ふ可、余亦此の教策中、緋川寶花集(二冊)
 を購ふ、其作の詞讀すん、高味ある、詞讀く多し
 編者と採するに違ふ、一亦一息ある、
 つて大いに喜ぶ、但し寶花集、自家の詩歌とあ
 らしめて前集の語とす、前者のたゞ、輯録するは
 也、寛文十三年、京都田原庄に左まの刊行なり、巻全

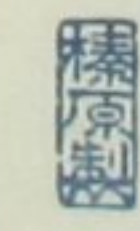


(藏黒岡屋)

皿小繪赤谷九古

門人惠詢の跋あり、一糸の滄紅と保とを筆中の珠とすべし

○澤陽少人の漢文自筆、行々鵝敷鳥居法二冊手
入る。山人の崑崙の人東正統と稱す、休多ぬ一宿を
巴陽の客を唱ふ、幕末藩士を糾合して義
に就く、下獄数年、命を断つて死せんとし、遂
に許さる、後其命を没け、徳を教授す、朝廷
に遺る位に叙せらる、六十歳より歿す、此人
の死若し澤陽少人の同人出づるも、山々々々、行
ふ、余の得る稿本、全集に入らん、或るや否んや
未比揆て、及んば、ねらる、不多く史論に係り
従ふ、所存の、海り、讀んで、眞政を、是の、征幹議



の二篇、他人の心とまゝ、隠れて自説を主張し、
よの也、此書、吾文、座やりの、寄本部、加ふ、
○二冊の法帖を購入、其後、道行碑の拓本を、
額に、日本長妙、鳳凰山安四、設寺南山、欽和、道行
碑とあり、支那浙江杭州府僧雲、屋所行の、撰
文とあり、^蔡東井の書とあり、大の、^蔡泰五年
夏四月とあり、^心其、^心康正長祿とあり、二三年、^心南
嶽和方ハ、^心足利時代の人、^心碑中、^心祝慶二年、^心証任、^心列在
山、^心賜安四、^心設寺、とあり、^心祝慶二年、^心証任、^心列在
日南、^心日初、^心澤子、^心敬、^心寺、^心山、^心欽、^心と、^心稱、^心す、^心流、^心陽、^心の、^心茂、^心放
存、^心原、^心氏、^心の、^心名、^心と、^心あり、^心懐、^心納、^心和、^心方、^心と、^心從、^心つ、^心て、^心受、^心業、^心和、^心方、^心當、^心に
長、^心州、^心を、^心任、^心太、^心守、^心原、^心と、^心禮、^心と、^心長、^心州、^心と、^心止、^心ま、^心ん、^心こと、^心也、

い、大い寺院を築く、和名こんろと云ふ、和名常て友
那：湖の志あり而して果々多治部支那に於くの日、祖の
状を具して抗物の僧：撰ハセテ碑文ハ則ちこん也と
す、此碑文ハ金吾家の撰弘和らきも、そのもと系撰ハ山口
金子福良翁一長、明治十三年ノ撰版を以り世々
伝ふ事あり即此二帖也、帖末一枚の字をへを脱す、
碑の全向をえりべし。

○余大養木書と齋文あり、木書日書家：卷下
尺讀教也、あり、過が、留：一紙、似、練の卷、末、附
一ある、題、卷を、焼、け、得、た、り、あり、み、平、敢、て、木、書
の書と多くの價を拂つて取するの意あり、と云木
書の下の人すも、此刊の木書也、墨を購ひよと



初、予、同、敢、て、欲、せ、り、但、以、舊、交、古、の、先、め、式
に、臨、み、た、り、も、香、葉、の、抄、と、呈、て、知、り、て、已、む、今、三
十日と投して此の三冊の邊、墨を換へ、こい木書
の、字、前、に、香、白、紙、を、献、するの意也、此者三冊
友人内海信之の着ぬ、折、觸、り、者、書、冊、一、冊、抄
是のよと云ふ、才一冊ハ木書、類、文、并、亦、名、才、二
冊、趣、以、雜、存、才、三、冊、木、書、待、存、也、三、冊、共、標、題
迄、木、書、の、自、題、あり、も、由、から、存、く、可、き、と、す、る
詩、文、を、種、々の、書、体、に、揮、毫、し、ある、ハ、珍、と、す、る、
是、也。

四月二日記

○頼春政の墨帖ハ、字の冠、辭ハ二頁二字を大書
し、字、よ、り、も、予、其、の、書、を、受、け、り、前、年、不、持、の

この初拓より前年夏印も今より、昨亦坊
前より元と辨のし仰くる。巻末に、明治十八年五月廿一日板
権免許六月廿九日出版人長崎屋好房謹啓と付
町二丁目三十二番邸頼元殿とあるを以つて此の
版の再版であることを知ると共に、版木の頼家に在
りしことを知り得たり。巻尾文化乙丑秋口惟定
とあり、春名の楷書に山陽とあり、武善傳とあり、
春名の防染者とも記され、この版の骨法を
脱し、軟かき、不：却つて版故を乞ふ。四月二日
の甲辰伏見見公寄、ピアニスト頼元其の邸へ、
つらき光の一人閑居を以つて、特、陪席の栄を以て、
公寄久慈宮家と公寄のまゝなる方と、皇后陛下



のい見事し今年一十三日、京都大宮の文料、
ついで修書なり。而も音楽子の板も、露田人し口つ
出席、演義、終つて、板原の巻、終つて、
晩春の巻、巻末を為す光の共、光の公寄も十
日、長し、長し、長し、長し、長し、長し、
中、何れの巻、巻末、長し、長し、長し、
京都、長し、長し、長し、長し、長し、長し、
、未だ、長し、長し、長し、長し、長し、長し、
不、長し、長し、長し、長し、長し、長し、
追隨の執事、長し、長し、長し、長し、長し、長し、
か、長し、長し、長し、長し、長し、長し、
一七、公寄を因り、長し、長し、長し、長し、長し、長し、

後の世は、先づから公行に對して、朋友のこころとくガツ
 クバウコノ柄と云ふもの光華を命ぜりしや、或ハ臣之執
 ニ下ニえたる若人を教育する物に斯くする事ある
 らずやとて、思ハセんとすもの、こゝに收める、國のメニエ
 ーハ公行ニ回るルヒ一の此の執事、の言葉と云ふ、
 其ハシロツタ兼ニ秋原の署名あり、おもしろき他日
 の記念物と云ふに存するべし。あつハシロツタ
 夫人秋原夫人のお公行の友人一人、光華に他ニ秋
 原の一人(婦人)一人と云ふ、公行の遺物、菊の紋
 章打出しの菓子と贈りたり。 四月三日記

光華の遺物



昭和八年 四月二日

- 菜 單
- 冷 葷 盆
- 熱 飯 盆
- 花 鮫 魚 翅
- 白 汁 魚 翅
- 京 葱 全 鴨
- 炒 乾 貝
- 炸 蝦 土 司 餅
- 鱸 魚
- 點心 蝦 炸 麵
- 新 鮮 水 菓

はない。西洋諸國側の賤視的精神は世界に瀰漫してゐる調査委員等に全然それが無いとは誰が期待し得やう。

日支の反目が次第に募つて、結局武力衝突に落ち行く外なきに至つた點を報告書が力説したのはよいとして、例へば孫逸仙の妥協的勢力の下に折角日支間の悪感情が次第に下火となつた際外間から之を煽つた者の仕草に付ては一言も述べてないのである。愛國的排日煽動の張本は米國仕込みの支那青年だと言はれるが、支那、米國その他で私の面會した人々は熱烈な對日偏見を抱いてゐたと評してよい。

支那の政治思想、政治行動に對する米國の勢力は、別に抑賣りの迹はないけれども、數年來愈々強まつて今では既に用意怠りなき後見役となつた。此の勢力は日支感情の乖離上重大要因となつてゐるかも知れぬ。

極東問題の争點もその範圍は廣いけれども、要するに條約の神聖とその底力とを

主張して止まざる米國と而してたとへ條約の章條には悖つても七千萬同胞の爲めに相應の活計を講ずるを以て第一の義務と主張する日本との角逐に歸するやの觀がある。リットン報告書は此の二者の溝渠に橋を架した。二者が果して之を渡つて相會するか否かは今後に徴するの外はない。

日支双方とも互に猜疑を逞うし、自らそれを誇張してゐる。現在支那に屬すると主張する、領土を日本が占領した事は否めないが、同時に又滿洲は多年賣買暴な恐嚇で他に取返へされるといふ状態で、列強は皆滿洲を以て虚脱したる支那の肢體と見做して來たのも事實である。而してリットン報告書を起草したのは此の列強の代表なのである。

今自から關知せる事實を證言してみる。極東問題が初めて國際問題化した時以來私はその種々相を研究し露、米、支那の政治家とも論じたことがある。滿洲

や支那諸省を如何にすべきか、盛んな議論の華を咲かしてゐたポーツマス會議の當時私はウィツテの顧問であつた關係上公表したのも秘密のものも文書は悉く私の手を通つたが、米國の執念なる企圖に付てイズウオリスキー外相と談じたことがあつた。

然しポーツマス會議を待つ迄もなく、遙かその以前より私は紛擾が擡頭し發展するものと見て之を注視してゐた。露帝戴冠式の際シベリヤ鐵道を豫定通り滿洲に引込み、其の借款を露國で調達せんとする計畫を特使李鴻章がいゝ加減に聞流してゐた其の時、ウィツテ伯は妙腕を揮つて自から目的を達しつゝ同時に支那の大政治家の面目をも立てたには感服した。即ち李全權には要領よく黄白を約して立所に取引を手打にしたものであつたが、此の折衝を通じて支那の權利と日本の權益とは要するに無視された。黄色人種の家督相續權が此等の清教徒的世界改革者の手で如何に露骨に値切り倒される

か私は膽に銘じて忘れない。垂涎措かざる國土に鐵道を敷設し、其の借款に應じて既得權を設定し、而して該既得權を保護する——必要なら武力に訴へて保護する——といふのが露國の遺口であつた。私は幸ひ列強の外交家運と昵懇であつたがその人々の密かに誓つたり、公然と匂はせたりした目標は滿洲を優越なる白人種専用の植民地たらしむるに在つた。彼等の話は例の婉曲な洗練された外交辭令に始まるが所詮は偽はらざる目的の告白に終るのであつた。

米國のシンジケート代表の故ウィラー・ド・ストリート氏の露都に著いた折氏をウィツテ伯に引合はせたのは私で、機に應じて通譯迄もした。又米國のマイヤー大使、ロツクヒル大使とウィツテ伯との會見も私が手配したのであつたが、ニコラス二世をはじめ之等政治家の熱望する所は、滿洲に唯白人のみを植民せしむると共に進んで支那本部を關係國間に分割し、萬難を排して日本を極東政治の要素

から排除するといふに在つた。幾分の修正を施せばそれは皆列強のプログラムならざるはない。リットン報告書を綴つた代表等の本國政府の誠意に對して日本側が信用を措かず、其の權益に關聯する問題を彼等の仲裁に委することを嫌ひ、時に猜疑の念を極端に馳するを見ても上記資料の経緯を識るものは毫も之を異としない。西洋諸國が誠意の證明をする第一段は、是非とも改悛の情を示し且つ不淨の財を返還するに在るけれどざる氣振りは毛頭ない。

日露國交破裂の直前、日本に向つて滿洲が日本の利益圏外に在ることの承認を露國の對日復牒は要求した。豊饒なる長江一帯を勢力範圍とする英國を羨んで獨逸が俄然應分の分け前を要求すれば、伊太利までも遅れ馳せに一切寄越せといつた。自己の利益が危殆に瀕すると見るや列強の「支那保全」に對する考へは此の通りである。然るに猫額大の土地や港灣でも日本がそれを求めるといふニュー

スを受取ると外交社界は時ならぬ波瀾を揚げて支那保全論や條約神聖論を擔ぎ出す。「劣等人種」にかく差別待遇を附すればどんな感ぜざるか敢て想像に難くはない。日支兩國並に西洋諸國の利害を一遍に調和せしめ得べき平和的提案及び現に行はれつゝある世界平和確立上の稱すべき努力をも事前に打破し去つた。現に角日本としては、其の國民の必要を満たす上に殘されたる唯一の手は今回の如く滿洲に打つて出るの一事のみで、而かも聯盟の調査委員等は良心上之を不可とせざるを得ないといふ状態である。

日本は支那保全の爲めに敢て日本國民を犠牲にしなかつた、といふのが日本の行動を非とする議論の根本である。而してその責は日本も所詮免かれ得るものではない。

極東問題討論の爲めポーツマス、聖ピートルブルグ又は華府に參集した有ゆる政治家に私は打つてつけに尋ねて見た。果して貴下は支那を主權國と認める

か、満洲を支那の不可分の一部と認めるかと、ところが、用語こそ異なれ、其の返答は皆「ノウ」であつた。日本の現在の地位に列強の政府を立たせてみても果してそれが日本以上に支那の保全を念とするかどうか反問したくなる。尤も此の故に日本の行動を是とする譯のないことは言ふまでもないが。

支那の保全なるものは唯日本を威嚇する爲めの道具として使用されたに過ぎない。北京政府は、彼の精力的だつた西太後の時代に於ても、平和好きの列強から必要につけ、氣まぐれにつけ——どれ程中國を分割されても身動き一つ出来なかつた。然るに日本が分け前に與らんとすれば「支那」といふものが忽にして主権ある不可侵の國と一變し、其の利益を擁護することが即ち世界平和の要諦となり、而して條約神聖論の生臭い説教が行はれるのである。

悪戦苦闘の結果それによつて日本が一部満洲其他の領土を獲得した所の下關係

約、之を打破すべく列強が如何に相協力したかの消息は尙ほ外交研究家の記憶する所である。列強政府は發作的義憤を發して不埒なる日本の行動を容赦せず、支那保全と政治道徳の名に於て日本に其の口中の餌を反吐すべく迫つたのであつたが彼等は鑿て其の餌に殺到し、支那保全の名に於て日本の掌握から救出した領土をば自ら占領し去つた。さればこそ彼等の誠意が今更ら問題となるので、日本側に言はせると列強は大抵支那から領土を割取した現在はその領土の確保に吸々としてゐる時代で米國亦滿洲に經濟的霸權を握るべく腐心してゐる。外交辭令を一皮剥けば今の遺り口は資力最も豊かな國家の爲め滿洲を合法的に没收するにも等しいといふ。

日本の軍事行動をリットン卿以下各委員が法理上並に道義上痛く非議すべきものとしたのは至當であり、全世界も亦此の態度には同感である。然し日支現在の紛争——列強は少なからずそれを助長した

——に就ては如何なる解決案も重大なる反對を招かずには措くまい。故に條約神聖論にした所が實際に行はれ難いものならば、條約遵守の形成にコダはらぬ事を以て差當り最安全なる行方とする。然るに報告書が認めて可とする對案は更に幾個の新條約を交渉せよと云ふのである。リットン報告の勸告は固より篤と考慮されるに相違ないけれど、勸告中には結局實現覺束なきもの無きを保せぬ。覺束なきものは支那中央政府との妥協を日本に勸告せることである。

日本は今日迄支那の中央政府を相手取ることを拒んだ、蓋し支那の中央政府なるものは今もなければ十年來曾て存在した例がない。地方政府なるものは澤山あつて、それが皆各自勝手な方向に動いてゐる。又クリスチャン・ジェネラル(馮玉祥)だとか、少壯督軍だとか、自稱司令官だとか、野心満々たる苦力上りの將領だとかいふもの、配下に都合十六の獨立軍があると見る人もゐる。此等の軍隊

には指揮の統一も、共通の目的乃至組織もない。一時大に囑望された馬將軍亦敢へなく失脚し、數奇なる閑歴に付て最近彼の發表した散漫な叙事をみると愈々彼の没落に止めを刺したかの觀があるし、一家の政見を抱き之によつて政府を結成した蔣介石も三年に滿たずして競争者の爲めに嫉視排斥された。更に又人物に據らず、全市を擧げて救國事業に當つた場合でも、南京は嶄然頭角をあらはし一時多大の希望を繋がしめたところ、その希望も廣東の罪惡的な反逆によつて粉碎された。

かく本部が中風に罹つてゐる間に滿洲は匪賊や兇漢の一大避難所となつた。滿洲國は住民に毫も保護の實を與へず、その奪はれたる所をば恢復せんが爲め農民は機を見て掠奪殺戮を行はんとし、而も「中央政府」たる日本からは何等の救済を求むるを得ず、米化支那人を黒幕とする南京政府は日本側鐵道は無價値ならしめんが爲めに畫策して餘すところなく、日

貨に無殘なるボイコットを適用し、ゲリラ戦と相俟つて日本の資源を蕩盡せしめつゝあつた。

日本は愈ルビコンを渡るに一決した。斯くて溥儀氏の下に滿洲新國家の建設となつた。それは恰かも華府政府がそれを必要とした時、コロンビヤ國よりバナマ分離獨立するを助けたと同様で、米國も丁度日本政府が滿洲國を承認したやうに急速にバナマ新共和國を承認した。而かも當時條約の神聖や國家の保全を口にする者はなかつたのであつた。

極東平和の條件として、人種平等權を認むるの急務なること、今唱へられつゝある條約神聖の意義を明定するの急務なることに付てはリットン報告書を探つても何一つ見當らぬ。

帝國主義的陰謀を藏するものとして日本を非難するは輕斷であり、恐らくは盲斷であらう。高所より大觀するものは日本の滿洲進出を以て寧ろ巴み難き生物學的衝動の所産、自然界必然の法則の歸趨

と見、如何に巧を凝らすとも人爲的拘束の如きは單なる鳴物に過ぎずと見るであらう。自然は日本に對して其の人々を容るべき空地を惜んだ。日本の外交政策の基調を形作つたものは先づ第一に此の繼母的な自然の手であり、第二は日本人口増加を禁ずる所の列強政府の惡意であり、第三は人口の増加を求むることの急なる事情である。而かも人口の増加はプロレタリアの動搖を來たし、彼等の持久力も殆んど盡き果てた。生色なき日本の農民は救國を叫んでやまぬけれども、彼等を歡は迎せんとする共產主義の盛氣樓か。フアンショの爆發を除いては救済らしいもの何處にも見當らなかつたのだ。かくして日本は遂ひに滿洲に於いて一切の解決を爲さうとしたのである。それは人爲的ではない。自然の力であつた。

○孫宗高僧の語教を讀み往令心の修攝を案
を拍つた二三を記す

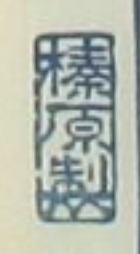
南岳云我十八解心法并趙州云我十八解破
家散宅

若向外得一知一解將為殺道且沒交涉(名運
未入不名運)未出汚心田故道不是(汚
山和方)

自損者人益自益者人損得之得失豈容易
乎黃州南和方

古德曰生也猶如苦粉死也還曰脫袴不以生
死為大憂可矣

有時奪人不奪境有時奪境不奪人有時



人境俱奪有時人境俱不奪臨海強師(四料詞)

逆境界易打順境界難打逆我意者只消一

箇忍字山之有少時便過了順境界真是一

無餘回避處如磁石與鐵相遇彼此不覺合心

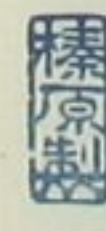
一處大處和方

有智之聲不過百里無聲之聲延及四海

六月火雲飛白雪

○高都の校友東山に於ける大涅槃會に於て松を長く地
へ会せんとし今次碑を建て来九のときつらき除雪の
式と云ふことき余もも歸師と云ふとある内狀を案
て其の事の内況を四年四月候入法の時より

去年秋の既二十九年と信じて、當時の校長
侯に慮及ぼし、余も東山疏河の時も予
侯に親しく其の先皇を睹ふ、侯の登山に京都紙
向中井三郎兵衛の懇請に據り、中井の東山
と京都の公園とをせんともあり、侯の検閲も
得んとし、京都市力微して事就かずと、侯
侯の手植の松に建てるべく、其を凌ぐ大樹と
せんとも、此の公園とせん、日此の松こそむ
大ゆき紀念樹とせん、京都市民の此の伸び行く常盤
木に鑑み、其の識る、松の侯の御願の言意
にあることと思ひ、中井の志を継承すること
と勉むべきがある。京都校友の建碑の奉、軍



の遺蹟も、紀念するに止まらず、京都市民を御願
する、非の大きな意味を寓する、可なり、侯が
松を手栽せん、其の御願、伊藤公が考へ、木戸
公の紀念碑、井上侯の御碑、其の御願、大隈侯
の御願、其の御願、不也、侯の手栽の松、将軍
塚神社より、東方約二〇メートルの所にあり、東郷元
帥、黒木大将手栽の松と對峙する、其也、今、其の
松、石の古さ、七尺中、三尺五寸、厚さ一尺、松の龍
馬あり、降臨の時、四十四年五月二十二日、登山紀
念、母校五十周年之際、早稲田大を京都校友会
建之と刻しあり、其、當時侯の登山の事、其の
七の早稲田大、余の他、其の、田中徳吉、河

いれり而時の記あり大隈侯一行と稱し然るが、今方
除幕式を行はんとするに方り、不冊子を定めてあり、
とを名に、校友梅屋金太郎の思出の記あり、歌
の詳を悉くして遺憾なく、余の隨筆の一節も
巻末に附載しあり、而時の事今日日夢に属し此書
と後之に追憶の感ありてあるものあり。

○新編の眼科進難波別平、来訪後次端々
漸和亭の逸事を得たり、和亭の所居に在り、
所居に田中家と云ふ所あり、和亭の其家
に流連して一妓に親しむ一女性を考ふるに、和
亭の納んた妻と云ふ人と近思ひし、和亭の如く
和、東京にゆつて、其母は尚書にあり、任長女あり

和亭

定むる所は、遂に母をの定むる所は、後之を別とある
定むる所あり、和亭が東京にあり、和妓に定むる所
状に田中家に花ありし、和亭は難波一振りと
手に入らざる由あり、すべし切々の情を洩らし、
和道と疎遠^{あはれ}なり、和亭は和妓の書簡
を見知らざることを、和亭は一字も和妓と云
りたる由、田中家に一旦和亭を来し、和亭も今日清也と
ありと云ふ。

四月四日記

○和亭のふ笑うたを、和亭の内部に和妓の
レキリあり、大印と仰むるあり、すくも和亭は
和めたる和道との覚し、和亭の書簡、和亭の
和書あり、和亭と和亭、和亭の和亭

やくまきをを致し容為の困しむ此一函を得て皆
整祀するを得たり。磐石の待て云々

有るも杉原の少澤、黄老の西遊人、
流す前分、茶林、湯、熱、如、の、煙、之、際、
陰、角、中、の、股、の、漸、生、石、煙、對、多、
細品評、須、吏、設、こ、山、風、起、杉、原、奉、
祭、一、極、法、

辛未首夏

七十一の磐石河口口

○古山と名する朝鮮の役、鮮人戦亡者供養の爲る
産物候の速る碑、ハ、日本の素十字精神、を、あ、ら、
ひ、す、大、切、の、志、料、と、す、平、登、山、毎、こ、此、碑、前、こ、立、ち、其、之、



と、後、ち、を、例、と、す、い、ふ、其、の、拓、本、未、比、架、中、の、ま、ま、く、永、く、
之、ん、を、獲、ん、こ、と、を、庶、或、し、と、し、初、の、と、坊、河、に、得、たり、
年、代、ハ、天、正、を、下、の、七、日、本、金、石、中、一、瀧、く、可、ら、る、の、
と、す、

四月四日記

此碑の中央にたの字を刻す

為る既回在陣之間敵味方聞天軍兵皆令人傳道也

慶長第四年 六月上漸 島津義弘 (并々息忠悔) 建立す也

此碑中之たの文アリ

慶長二年八月十五日、於金羅道南原表大の四軍
兵數千騎被討捕之内、至當手前、四万廿人伐果畢
同十月朔於慶尚道泗川表大の人八万余兵、斃于亡畢

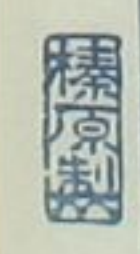
くまの。僅かに選心出たり左の四十餘紙一過き
ま。

曆 天文四年の能狂言伶曆一卷

音曆

拓本 水戸烈公大砲銘拓本十枚紙

各種勅の拓本



明治年間洋装標紙拓本

書物 京都天の大火の節 藤貞幹の庭に落

ちたる禁火の玉子貞幹の談話了

長崎くまのし清人医河胡北新の遺状

芳原三浦屋の当世日記

別譜

横濱安士自字書 流平曲宴盛 最後

蜀山人の狂歌の挿巻七のり判

取帳(複製本)

寛永度書落麻理比野歌(複製本)

杉平冠山祝言千社山神記二冊

原稿

道遠の役行者初稿

口為 一休禪師

口為の裁判所、差出しの鑑定書

極楽居士の寄嶺山風、加筆を求

めたる時平公七笑

福時大将の従僕講談師末林林思猿

の大將傳草稿

海名恒魯文の撰本草稿

五名物帖

及故

藤田幽谷大居士の帝家文借用証文
野崎左文の海名恒魯文、寄七字説



状

一ノ関の有様故実家本関百里、共ノ以

底方の免状

福池権左の芳原の妓、代ノ海名恒魯

文、寄七字の証文

中井敬所が誤つて中室の謝金包を人

寄せしをり換ひの文書

王子権左の冷馬文晁下給

西南市件官文書、電燈文

手簡

木戸公佛蘭西の籠籠用袋に長篇の詩を
録し、古木甫存、寄七字、古簡

慶長七心の 実書簡文集印鑑風呂巻
具足

疏方の松浦武四郎と山崎を以て書状

言目録ありおこせを以て以て手紙

寺崎虎業乱碎の状を以て以て書簡

芳岳抄(女文合七)

上方抄(女文合七)

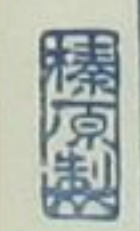
書志

かむちや元成の書しつ十牛圖一卷

永根か守しつ其角の十牛圖一卷

曉斎の書しつ群音娛樂圖 一卷

保内(遠)道就書葉山子 三幅



竹内(遠)道加海べしセントの歌を手拭に
染ぬきこるこゝろ一幅

尾崎紅葉の沈句と書しつ枝折一面(波の画有)

千蔭造(文)の内孫(書)と書しつ(口)は(墨)田

川の回(俳)優(花)魁(門)人(口)は(書)を(手)紙

頼山陽が田能村(書)の(口)は(書)置(炬)燵(を)書し

て(扇)面(二)枚

道遠(口)は(遠)暖(口)の(就)書(一)幅

経

鵬斎酒経

支那：刻さん(中)将(姫)の(書)麻(文)院(羅)日
本(覆)刺(二)種

育心經
あはれいしう種立種

種

蘭文匡科骨の名词骨牌一箱

長崎の政文ふくじ

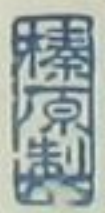
許家梵技千社回安本

スミシム博士記念千社札

有用海産語(定本百種法こみ)

溝次郎伯國常用張扇并墨次

橋本雅鈴妓の芳名を畫し以烟巻入



○梅老の時即漸やう別えとす時保と測を得し
花歎居士の碑銘を讀む花歎洋い思ふ
三態式八巻と辨す、亦其人此人丹を善く
し、妙に梅花を畫く、梅花の時を景と研とを
へて花塙に放浪し、細かに花貌を寫し、一々其
を品藻し、織細巻とす、と無し、其の精巧前
古人より、梅花傳神の祖とす、此人梅花に耽
溺するの深き自ら辨し、花歎とす、その室の甲
寅八月年の三十四年とす、逝くや、遺命を傳くを
影く、我を梅花の下に茶毗と附し、其の父と骨
とも嵐山堰の洞に投棄せし、吾等則ち是の
と遺族其命の如くすと、古来梅を愛するもの

群一とてまゝ、一時の息をゆるぎ、過か花歎の如く、花
を狂しむるも、あるを改め、さうして、執着を去るのあり
とも受へず、筆に集まるるも、居士平生花を畫
するの筆、皆其の如き所也、居士の歿するや、筆
工悲んじ、其遺筆を埋めて一碑を建てんとす、幸々居士
の流を改むる、故自勝るも、亦極老をぬんじ、
畫し、花隱と因強し、そのあり、吾儀して居士終
生執着の地、嵐山を筆を埋め、碑を立、其の
依つて、嵐山と一直流を流くるも、ふんじ、若し海棠
を畫し、皆皆格観曰く、名花を愛するも、狂
に、此の如く、こんい、是ん、騷人一時の雅言、過ぎ、花
歎の如き、其の如く、名花を愛して、死を、抵つとも、と



その可なり、梅は希なるの銘に云く

愛花畫花、若くは被歎、投骨于火、化反于烟、
檀弓之内、嵐山之歎、心清現、素人、折世遷、
退筆百束、遺香千年

○家老の書畫、骨筆、目録一冊アリ、若し七、新
二層、花竹記と云ふ、十二行、紙五十枚、綴り、その漸
やく、満ち、餘白を存せ、依つて、別一冊を添へ、坤
巻とす、此の花竹記、其の先、が家老印の目録十
枚、昨日筆し、畢す、印の目録、亦冊あるも、散佚
の實あるを以つて、花竹記の内に入り、四月七日
家老印の目録を修むる、三日間を費し、此の宜物
點検、時間を要し、此の如く、在来り、目録、三、逆

一此の如く少くも一、殊に無刻の印材ハ一七録し
てその如くおぼしめし、其数八十餘、及心中
の如く、運出あり。無刻の印ハ別一函に存す
女家も、未だそのまゝ手付及少ぬ、同通の他
日を動すとす。

今迄の目録ハ、印文も妙し、但に名家氏名印を
別つて、類とす、いりしを悔也、雜印の取捨に惑
ふ、其に多く、他日を動し、略せ、家祖の印
先考の印、余の印、專家に属す、その方からせん
とも、此亦未だ、至らざる、家印ハ別一冊を
可とす。

尚云く、於印中、刻の可く、その、刻し、此、氏



名の并し、難き、その、検出、磨く、その、改刻の、材と
す、可く、え、亦、同通、の、他日を、期す、とす。
尚云く、印、蓋、二十、数、個、あり、多く、支那の、革、製、紙、を
箔、給、煙、箱、を、封、す、よ、り、其、一、二、書、も、焼
い、入、り、その、七、係、七、を、目、録、を、他、に、え、等、ハ、一
時、押、入、り、納、め、置、き、す、所、前、年、越、休、人、も、未、だ
其、年、の、書、を、扉、に、封、す、其、封、し、たる、書、架、を、焼、く
ん、と、す、今、日、後、し、一切、を、こ、ん、と、存、す、え、印
運、の、権、大、き、く、三、日、後、中、に、あり。



七一八 黨萬歲
 七一八だんを標したトラックが、ニューヨークの街に現れた。民衆は心で興奮を叫ぶところ

東京新聞

○吳須未谷國鑑、東洋國鑑研究所より出版。傳
 吾の師印創人、此日印刷と格尚一、故を以て
 一本千八百、北方卷類、奥田誠一の、吳須春
 樹、就しての一文を載せ、同五十九を載ち、各圖
 和洋二種の解説あり、原画の或る二三を除け、皆
 男守岩崎の強大花、幾人とも種の吳須是
 を鑑、雅しくとそを得て、岩崎家の、傳、此是
 市古翁と、是の、未谷吳須、我邦人の目、熟す、
 新の永樂、古本、古考之、人、倣ひ、よ、多し、然、
 の研究、に、つ、つ、今、僅、の、指、を、注、の、
 る、文、も、考、に、数、あり、不、あ、る、
 唯、此、國、鑑、と、一、扱、
 かくりて、
 次、の、國、と、味、い、時、の、移、る、を、完、へ、す

○支那事変に皇軍敵を長成に歴し戦へぬと際りと
國難に日二月に益々濃厚とす行きてつゝ上下一致
非常時此度とすを得たり時保田是寺とせん
基北條時宗の六百十年の遠志を修む事ハ本月
の在り時宗の元寇を屈服し多豪傑也此世
七年の次天皇ハ特ニ從一位を賜ふ。四威を以て
耀し多端の蓋し時宗に始まる。對外硬の政策を
氣今も存す時宗に是の可なり。四難に南も
領倉南時の奉回一致の傲いさ。可なり此論に於て
時宗の遠志を修むる義ありと云ふべし、
此の志を紀念し佛日庵の寶物公物日記一巻を撰
む。余も亦其物を愛し佛日庵の時宗入廟の存



する事とて此の日記の久治四年の奥書ある事
也此卷は神代卷の宗祿所
也此條時宗公の冊子添く事 昭和四年四月十一日記
○基成年齡僅ハ五廿五耳音楽の天才を以て稱せ
研究の爲の外遊帰朝に歸ちる年、疾患を蒙りて愈
一が弟市休す、天斯人の才を狭む何んを甚に歎
其妹に愛子又音楽に長し兄に比して甚しき速色不
一、一乃の母に付んて市の家に来り、全勉の後
早く臥す、忽ち其家のピアノ室に於て音起り侍
つて枕を以て床に、予音楽の門外漢なれども人を魅す
この妙音を余を以て母を仰ぐも一鼓二鼓三鼓
の益々加ふる、予命の歎しを云く、同一の樂也也
家兒日夕彈奏する所と何んを再々其比相異

瓜をさるお目をかけらるゝ方、進上^{進上}の心、板七ぬい瓜
ぢや。このハ女方が手心かと仰せらるゝを依つて、申し
私の手心で清浄ると申し、心の中もぬい瓜ぢや。直に
無心する人も、女がある程、瓜をま田つまうん
いと仰せらるゝ。何ともさるゝ、後一や、何がある
畏つて清浄ると申し、某の手心で清浄ると申し
ぬい依つて。今更らるゝ事もぬいと申すゝぬい。是れ
ま及びぬい。今更らるゝ行く。瓜を取つて矢くら
うとなす。此ゆゑ又矢くらうと。ぬいぬい。瓜
名を教ふに、さしとおいぬい。瓜まか見えぬいぬい
ぬいぬい。又ぬいぬい。腹をさるゝ。今更らるゝ
をさるゝ。ぬいぬい。何とやら胸騒おん



葉をさる。此のちや。いや又べ垣を破つて、豆いぬ
か、女侍ある。さして瓜まか見えぬいぬい。ぬいぬい
見えぬいぬい。比ゆらうと。ぬいぬい。ぬいぬい。坊
つておいぬい。瓜まか見えぬいぬい。ぬいぬい。徐
々人形の側へあつた。女侍を潰す。是れぬい
ぬい。不思儀な事ぢや。夕べ人形を打倒い
ぬい。ぬいぬい。又さしておいぬい。是れ瓜まか見えぬいぬい
ひらうぬい。合然かぬいぬい。はあ、合然かぬい。山まてぬい
者の葉をかき。まかぬいぬい。ぬいぬい。未いぬい。吟附れ
ぬいぬい。ぬいぬい。人形斗、まておいぬい
ぬい。女侍を打倒ぬいぬい。ぬいぬい。ぬいぬい。下は
ぬいぬい。ぬいぬい。珠、此あ山子は。夕べ

リは死ぬ人々似れ。(こゝろを仕換ふる。下は死ぬ
そのまきの面々指さし〜) 笑ふ。(其は人ト也。
某をきると元居る。いや思ひ出〜) いたも
に多し。荒い衆が踊とせらる。高年の中踊
と鬼がまゝ。高とせうと云ふん。幸の事。此人形
をハ遊入〜。某が鬼にうらむ。ちうてえやう。
わいく。ぬい杖もあつ。急いでまゐるを見せ。め
はの遊入。地獄遠きまゝ。極楽遠かまゝ。
あけとこま。(カケリまて) 先鬼のまゐへんが
ぬめらう。人形ぢや。依つてまゐ力が無い。せうな
から。この遊入あつ。某が遊入。えまゝ。こま
あつ。此人形を鬼〜。身共が死入る。

つてまゝ。んて見やう。幸はま引信がある。あつ
しや。こまの冬〜。候に。さゝぬる。神も候ひ。行
けど行のぬ死出の山。行かん。とまへん。引止む。止
杖む。せうとおつ。こまのめらる。何者やら。元
さうつ。遊入。人々。無いか。不思議さ。しや
何者かうつ。ぬい。今。行のぬ。今。地獄を
引。肩にかけ。えやうつ。ハ。ね。わ。く。ぬ。松
へ。お。ぢ。や。地獄を。引。け。ん。下。と。下。は。つ
ま。く。あ。ま。も。可。笑。い。こ。ま。の。遊。入。
ぬい。ま。ら。や。こ。ま。の。氣。ま。さ。い。さ。ら。が。七。一。が
た。め。ん。と。え。や。う。行。け。と。行。か。ぬ。死。出。の。山。行
かん。と。ま。へ。ん。引。止。む。止。ま。ん。ば。杖。の。せ。う。と。打

墨子

め碗男子であるが、考へから縁結びの神と崇められ、江戸の末勤まは社前々文茶屋と云ふかあるをちい文を委つた。此悉々の交換も此茶屋か媒妁と云ふて行ひんれと云ふ、顔ふ似合の粹神であるといふ。刑辭の言何奇希と其娘もお後ひあふか、娘の名を景子と云ふてゐる。評ハ、日本の都は生んれ、墨子のまを割んハ、日本京にありと、或るまは、思ふハ、或る時、米回帰人が田舎で鶏を購ふて、明日自宅へ運んてくんとし、頼んてゆもして、或るまは、鶏を運んて来れか、是れ鶏卵か、添つてゐるのか、未婦人の卵ハ、買のれ免か、まはと云ふと、其まのまふ、この卵ハ、生んれ、のれから、ある所の所有れと云ふハ、のれ、婦人

鶏卵

墨子

梅餅

かひどく感して日本を正直とすもの、さういふ物米後志きり、日本を吹聴してゐると云ふ。今墨子の梅を思ふ例の梅餅を贈るは、まは引札をえると云代に、免のまは後を引き、又政七年の一年間の梅のまの法込か三十一梅、一梅、梅のまか約二萬五千枚、全部で七十七萬五千枚と云ふから、まは、梅餅もあるし、此ことが死んる。

の伊原春歌公の詩文を出版せんとし、其の内容を見本を寄せても、文の見本の内々露太子遺難事仲二、潤す公の手箱一、僅かに首部と米十のまは、此事件のまは、公の公の、敬西駿し、この状宛、公の、公の、お根塔の字

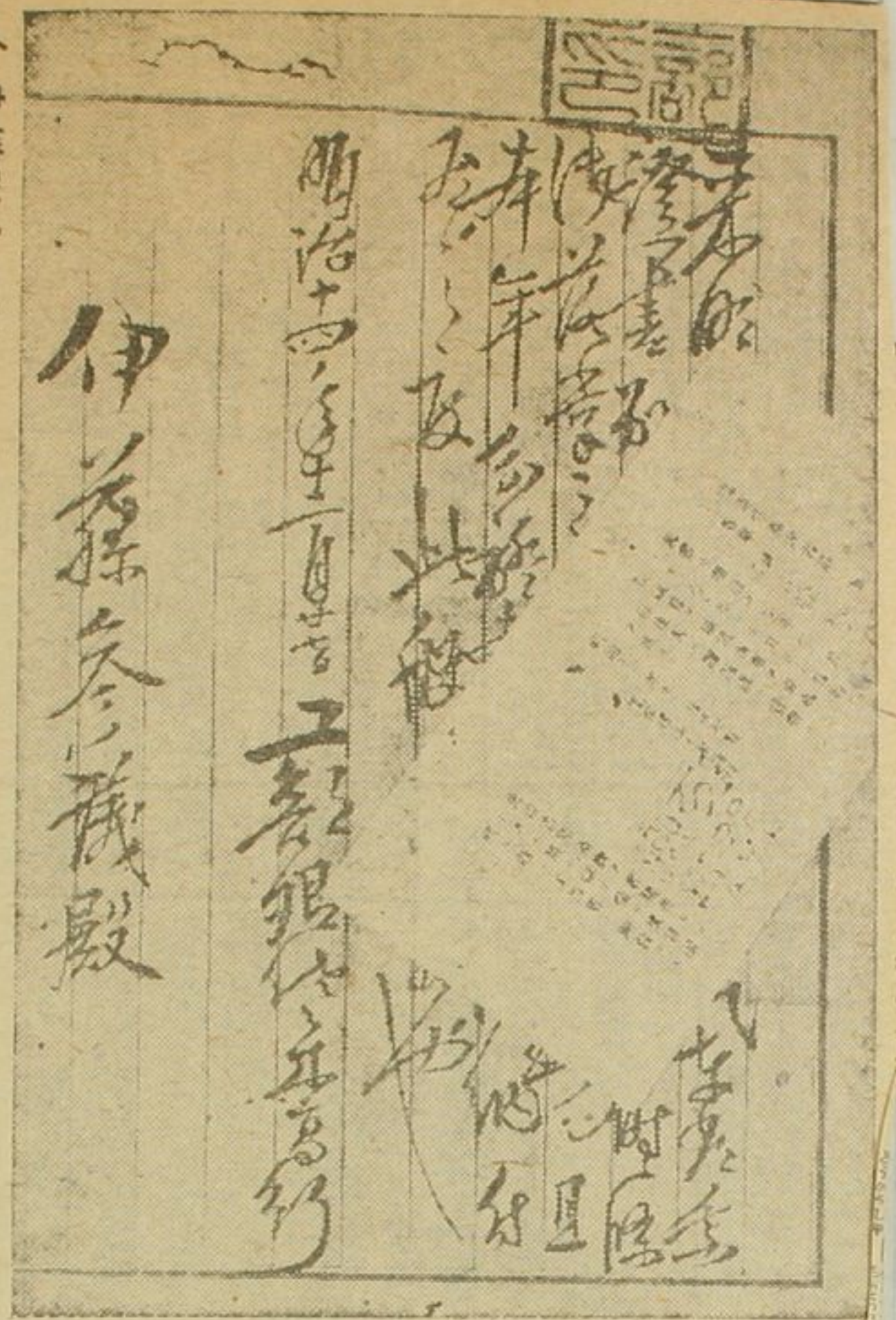
の誤りあり、山倉公電信を空ろに小田原に送りし
 すと報ず、時の代理大臣は松方とす、其の大臣を
 電信に報ず、公倉皇に報ず、其の大臣を
 して其の報ず、一時、直ぐに命あり、聖上ハ御
 寝候す、御寝候す、命ありと、断り

露國皇太子遭難當時ノ記 (明治二十四年)

明治二十四年五月十一日、余塔ノ澤温泉ニ在リ、岩倉
 公爵電信ヲ以テ報ジテ曰、至急ノ使命ヲ帶ビテ小田原
 ニ來訪セントスト。須臾ニシテ松方總理大臣ノ電報ヲ

表前公文金

二四



伊藤家から発見された
 故博文公の鐵道パス
 明治十四年十二月二十七日附をもつて時
 使用の汽車票に工部省から發行した同十五
 日、故博文公が伊藤公邸に保存されて
 いたことが判明し、最近伊藤公邸から鐵道省に寄贈して來た、鐵道省では得難き珍品だと早速これ
 を鐵道博物館に陳列して一般に公開する事になつた、寫眞は此のパスと時の工部省佐々木高行郷か
 ら發見に宛てた交付の手紙

置ノ巡查其帶ル所ノ劍ヲ
 傷セシメタリ、事容易ナラ
 文ヲ讀ミ驚愕ニ勝ヘズ、晚
 直ニ人力車ヲ命ジ、上京ノ
 倉公爵ノ來着スルニ會ス。
 上京スベキノ内旨ヲ拜ス。
 二到リ、最終汽車ニ乗ジ、翌
 宮廷ヨリ用意ノ馬車ニテ
 二御寢ノ趣ヲ聞キ、宮内大
 臣所ニ伺候スベキノ命アリ。

有りて事態容易くも階下の軒念の一方よりき
りし状を見よへし憾むくハ御寝所ニ柱付の二公
奉答の摸状を廻く隔る美人を望むの感あ
くしちり出頭○有帝套の狡猾手腹の近の
完本を得て親人ことを庶幾すとも四月十五日
○春由に降り死のんてに於て出ると得ず伺を利
し書画目録と持て卷子帳子とすう其の
を抜き別と目録を化す此類に属するもの物百餘
あり大體徑若ハ卷子帳子と別にか數目録あ
ん心此の内に入らず斯く類を分はせんが換表に
あて不使るる日類表に出入とあるも幅數より
幅の目録を前記するも其も卷子類を別とする



画あり、日を異くして幅數書畫の訂正目録を
心んことを記す。

四月十五日記

○熟記の書畫向春水の詩を額面として寫す
未の詩ハ泰山と曰飲泰山と題し詩に熟し
ありす、泰山は泰山と題し詩に熟し
ひとあるも、泰山、其くはよハ氣あるかつて
念指動き終る時ハ此詩ハ春水の集り
元南くハ、夏辛の心故逆し、表柱ハ額縁
皆之後、日よも、おあ時ハ、詩云
附一あり、價四十五圓、詩云

小橋踏水水深く、近 君有侍白鳥霞敷
家曉雲霧帯、前峰、新海、漫、漫、網

あかむ山年一平家と松と相時々合することを得し
が今早稲田の創之南時の関係者一人を失ひ、亦を
等田完合の一人を失ひり、
四月二十一日

自分七指を多きけし起りも、常つて板垣伯とゆふ
此時の事をも口説つれ。伯の窮困時代より芝公

園日某地と云ふ處に居ると。自今ハ母叔回ハつたか
と云ふ一ハ之派の家かえ而していり。書き付けし持券
一は書地の家前ニあり板垣さんのお宅にどこかと
ぬれら。こゝに之と云ふ都が隣子御一々又こゝを
る。隣子があつた。○親くしきこゝに伯か居ると
此のふゆうい。伯の言ま。玄関子ハ無つた。伯ハ玄関
子の居るべき小字を左橋日不三元と自から玄関者
を尋ね居ると此のふゆ。自今ハ其時伯の困窮を
氣の毒に感ふ。伯ハ美と共ニ大衆を率ふる堂派
の首領。斯くもあつた。美ニ較べると吾
の親方(玄関)ハ若大であつた。堂のほう務所ハ
志を成へる。こゝにあり。美をきくと美が尊大

源氏物語

であつた。と云ふ。多くの坊主玄関子が人を一侯の
尊大と思ハレた。此の云関子と記難し。自今ハ
祝き終つて。因日田中徳吉ハ都府前京都又出
一先度ハ因日四年。東山ニ遊ヒ手裁々
此松の建碑式に臨まん。其の状況を報告
あり。一と使一因日。一と洋細の報告があつた。
(四月十七日記)

○此山の大隈屋ニ満つて根津(喜一)の家がある。いづ
れが根津の石ひある。係一。此ハ根津を訪ふ事
。概ハ。内。候。亭。一。三。の。記。分。
書。出。身。の。因。人。と。代。根。津。所。在。の。古。紙。書。を。視

陳列せられてゐる。この二千年前のものと云ふが、面貌の因
満の先から婦人の面を執ることといひ難く容れさせ、ま
ご彫刻藝術の参考として、随一のよめであること
を感じた。但し惜しむらくは無残な首だけも切り
取つてあるが、多分石室を守つて僧に贈贈して、
くと首を多くを譲り受けて目もく將來したもので
あつたらう。身想くく天孫山の石室を首無しの
像が林立してゐることと、想像を馳せん
衣んを催した。

此の佛像陳列室は殊に注意を惹かぬほどの徑を納
の了一基の書架であつた。この高さ約六尺幅約
五尺前面の扉が四枚あつて古色も茶色然りとあ

かぬもの形態の壯麗ささるゝので大いに興味を感じ
る扉を開いて見ると、扉の裏より長い漢文の記
が螺鈿に纏してあり、四行の欄に、卷子を約十卷
を納める扁平の箱が装束四重せん、一行二十枚おど
も納め得るやうに仕切りがある。一箱と云り出ると見
ると大般若の字經が五重せん、元々巻子のあつたよ
か皆折帖に改裝せられてゐる。字平に必と云一七一人と
ハ思はんやうに、皆錫会時代の年號があつた
中一尾淨阿と款した行があつた。扉裏の巻字
を換へると、こんも尾淨阿の落款があつた。寛
元の年號が記してある。即ち此の行架は錫会
末期の製成心と係ることを知れた。主人の譲つてや

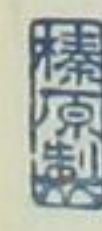
入心への西大寺の田春日荒宮の意物に前年寺が彫られた時、えを以て公伝証書に換へたといふから、その表に位して入れられたといふ、惜しいところ、六巻あるべきといふが、五巻程謝けしめる、此の向うも尊氏の位もあつたといふ。また今五巻の力も、教在しとみる、わあ、わあ。各紙の首尾に春日荒宮の印がもたらせられた。あるから、教供したのも、田春日の印がある、相違ない。主人の身草が淡に合つて長る内、任祭の上頭のこと、蓋を取り外し、其の裏面を示した。こんども、教中行の細書の刻字があつて、えを讀んで、こと、危浄河の素性も初めと合つた。こんが、大盛の跡と、南の婦人の、此の文意の中、大盛の素性が



あつた寺に属する田畑の日録があつた、又法寛元の年、節の下、危浄河の花が刻さんもある。人の氣のつらぬ、不に斯う大切と、刻し、この極め、利巧の沙汰、いふと、感下、書き添へ、これが、浄河の録、これ田地の榎木庄、あつた、この刻書、え、いつた、このことを得た。

安田、此は、自筆、案、惚んこみ、自分も、此は、案を撰送し、石巻の位を納め、そのか、ん、ま、ふ、これ、自分も、大い、の、整、成、も、ま、つ、た、更、に、別、家、と、入、つ、て、見、る、こ、こ、目、を、惹、く、こ、の、洋、畫、の、美、人、裸、体、の、大、額、画、が、な、か、ん、て、あ、つ、た、何、人、の、筆、か、や、ま、き、漏、れ、に、か、多、分、洋、人、の、筆、か、う、つ、た、あ、ら、う、確、か、ら、な、書、と、考、へ、た、此

わすゝか出来の書史の研究と云ふことゝも、何んとして
此の標本の澤山無んば、如何か、従来例に於て、このこと
念に、七無い、この如く、所へ偏して、選擇が
杜撰であつた、玉石が混濁した、今款や倫次が、
出来てゐる、この為め、研究の資料、と、いふ、
意見を、概して、著者の人の考法を、公合して、著
本影譜の學術的の、標鑑を、經て、在本を、表送
し、既二十輯（二輯約十枚）を出し、今、才二
輯、進んでゐる、故年、繼續する、我が邦の善本
の面目、全部包圍せんと、あらう、併し、善本
影譜、主ら、硬派の書物に限る、この、
雁行して、軟派の書物の影譜、七、必要がある、



吾等の十数年、其つと、稀書復本、の、
近世、元、著、名、著、標、本、集、を、出、す、こ、と、
第一輯、が、出版、せ、ら、れ、た、
啓蒙的、の、廿、い、よ、も、採、り、こ、と、
八、大、係、り、の、誰、ん、も、知、て、ゐ、る、本、の、
す、の、の、活、字、本、の、原、本、の、面、目、の、或、ん、と、
右、い、か、ら、い、ん、を、又、り、る、是、の、如、く、
エ、ン、ニ、ヤ、リ、本、の、
の、か、す、ら、知、ら、る、い、
等、流、布、し、た、種、々、の、
の、利、害、本、の、の、の、
啓蒙的、の、採、り、る、是、の、如、く、

といふ思ふに、誤解不違じ、皇軍の犠牲的とは
備とらうて、此の表示を為すに、此のことも思ふ
かうしぬ。

○廣州市の先哲遺墨集の巨冊二本と字を有する
昭和六年、頼山陽の百年祭を息苦んじ時、頼家
の墓域の隣地比次山公園に山陽記念堂、文徳殿と
建設すこと、日公決意せん。其時、頼公起り、あつ
陣列せし、頼家一門の遺墨を始め、維新の諸豪
を翼賛せし、前年の遺墨を併せ、刷行頒布
すことし、今、頼印が成つた、其の寄附を
此の遺墨蒐集集の如く、四年、編輯家主任山崎
柳谷の自公を招ひ、協派を目交はし、此の



ある。自公も花の墨蹟が十数點、早大園方故不
花の墨蹟が、珠の多く、ぬのし、此故の
ま、此の遺墨の遺が、取敢へず、大書を
編むことす。

四月廿三日

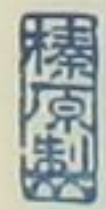
○公債・發賣のいつの世も、誰の世も、花の
日露戦役の揚句、露軍の居後、此が充分償還を
ぬる、うら不平、公然と各前年、公の流出所を
焼き、打し、政治的のもの、繁栄、在り、
とす、此の世も、未だ、四幕、時代、山井、正官
事件、大阪、大塩、平、八、中、事件、其の政治的
公債の現、此の世も、三田村、島、魚の「江戸の子」を、
人に見ると、公債の現、此の世も、見、此の世も、一、二、三、

元正間記ハ元祿の記好あるが、是れに依ると、赤穂
長士が切腹を以て時比、何れも知らず日本橋の
けとある制札を墨くろく塗つたり、亦書きたまは
建てると、泥を塗つたりし。遂に制札を取外し
て川へ投げ入れたとあるが、是れ制札の忠告をば
けきき云々とあるのは、忠義の上切腹を申すは
ころも、制札に度は仕打び、エント文句にウリの皮
ルと云ふ少候から起つたものと見え、品川の住四
谷が江戸の入口の制札に階々忠告云々のところ
と墨や泥でぬぐつふしとある。是れから延享二年
五月十一日と云ふは、お玉ヶ池の旗本若狭式部と
いふ人の邸宅に市民が四五百人が白紙をいれ来りて

赤穂

悪口と云ふやら瓦礫を飛ばすやらし。何人の名も
な幕府の役人が斯う飛ぶ紙片を受けられたと云ふ
此の式部、大村や泥坊を云傳する役目があるは、
是れやり方が是れと云ふは、評判か、いふ為の幕府
府の其職を免し此位のあるが、此式部の名も此意
地々々々若しめんと云ふ傳と云ふし。是れは、憤怒が
一時、おしと斯う飛ぶと及人比のひある。赤天の四
年四月七日殿中にて佐々善左衛門に斬られた。若
年岩の田沼山城守の若狭儀に臨んが、赤白橋
の尾藏から、お玉ヶ池の四軒寺の、勝井寺へ送る途中
大勢の市民が瓦石を飛ばし、罵詈雑言を浴せ、遂に
棺を破壊するまゝの騒ぎをやつた。ヤマト寺に着

と今なる多数の士金が抜かつておの口々の悪口を
さして恨みを極めた。これを制せんといくらこの錢
を盡したか、錢のらん方が少まいと云ふのが、制止を
きかず、錢のちを博しとやうに治めたとあるが、こと
一種の公平懐ひ、米價高直の折柄田沼父子が米の
買ひとて私利を回つたと云ふ評判もあつたので、
御役御免と云つて三回の中を數く引えらうと
する時、武士体のもつて交つて數百人が瓦石を飛
し、辻考何不を叩きこいさやうな騒ぎをやつた。
お世の改革する飽分市民を困らしたから、行つた騒
ぎを清め、これの無理なぬことである。此他米價



の騒ぎから一揆が起つた。享保十八年二月の本郷
の米刈屋高河傳と高河の家を叩き殺す一此事件
かき、天のせり五月三日一原園心、東京中の米
屋を手取り潰れ、破壊して、是が六の河七つて、
寄せられた數、五千七あつた。是が二十三日ころに、
暴を極め、被害、八千軒も及んだと云ふ。此等騒
動は政治的むさういものもあるが、公憤の現れであること
同一で、団体の騒ぎと云つて、是等も大なるものも、
難かつたと思ふ。

○芝島遊の江戸子の中に刺ちの旗がいろいろ出てお
る。二三を摘ぬらん。

天正十五年二月十七日、大和、大納言秀長卿が上方

勢い万端論に中四勢三葉の勢をかくして三原原正
の代つてあふ日向の高城に取法の比き時島津中
勢三葉の勢の口勢目こゆる上方ねんを説
を説き、為死の産摩勢五るはかりが打死し
その討死に産摩勢の屍の腕に「今日今日
討死何某」と入墨をかくしあつたことよ

一 ねぬか悪人：深い思ひ入を表すことといふく
の入痣（不だう）（或い堀入ともよぶ）をやつた客の若を
らしいてカンサマ命と堀の比勢のあさ多い。男子は
ねぬかの役所を入痣しとあさあう、お撲も
流行して或る相撲は自命か関係しあさあ
種乳の女の若も身体に記をぬをぬわぬ



リつけに此男を緋名して「過」云帳男しとよぶ
或る路なり「死次才」と削り或るよふ「命不入
ハ情大甚産」と削つた如道とと侍を削りや
うは遊化し。天保四年九月四代目の歌在
門ハ芝歌とよぶてみか中村屋に供利伽羅
大和と渡しし時、も方の腰に供利伽羅
の刺ちをいれむ大いさあけ比。大名の二三男
に刺ちをやつた放逐ものもあつた松平不昧の
父が海に刺ちかすきむ側せ中の身体に
刺ちをせせて帷子を着せたと云ひます。山
の千代辰に産物兵衛といふか自慢の刺ち
の持主であつたか、神田も自慢の一人あつた

互いに見せつこともやつた。神田兒ハ龜頭の上ニ
紋を二匹の彫つておれ、こゝに彫らる傷を言
へる所である。軍配ハ神田兒の上つれらしい。
氣負のせむしも、男に買けり刺ちをやつたが
随分おもしろい繪を彫つたよもある。

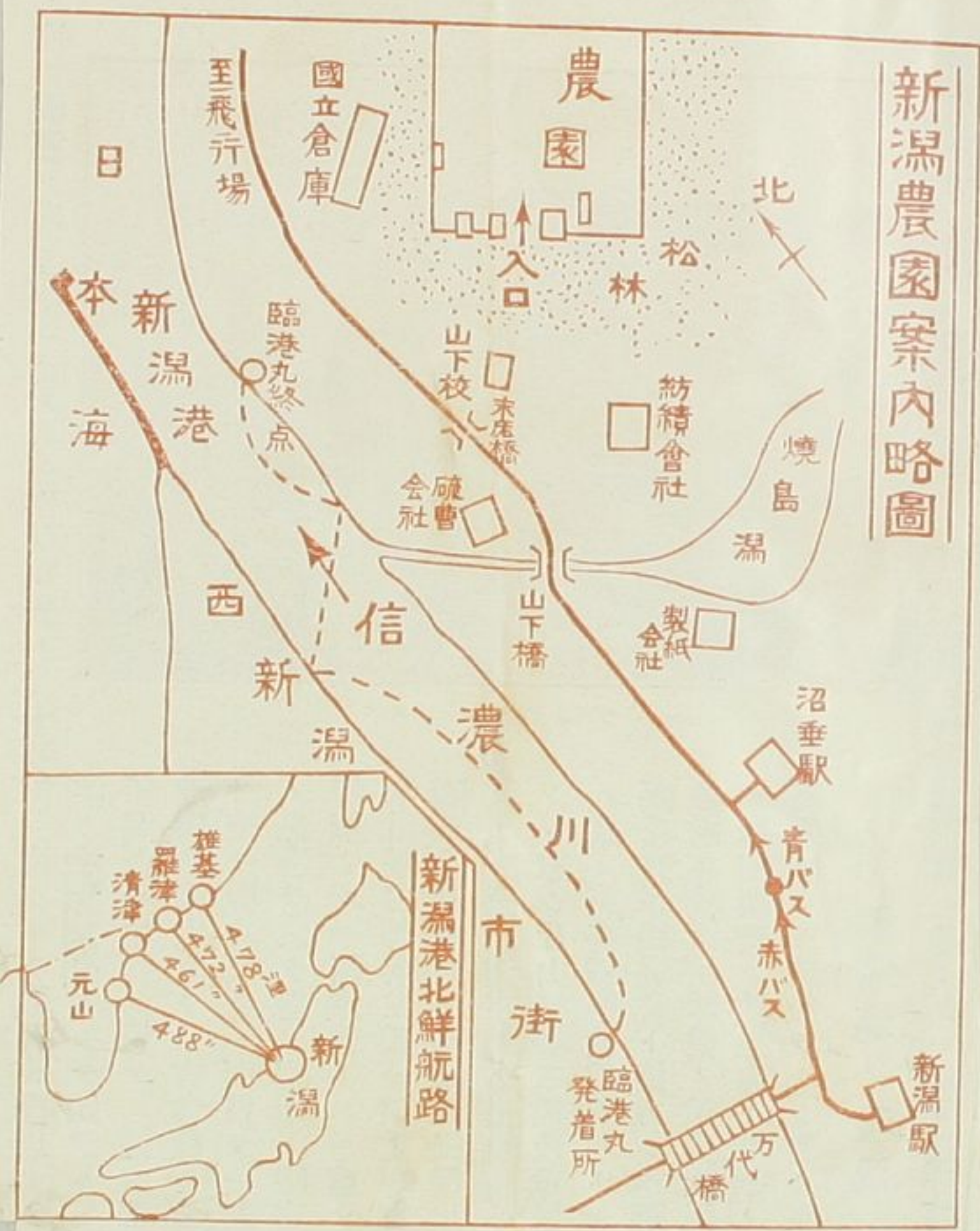
○貝合の小品が案外多い。大抵はお四郎の玩具が花と
あるが、こゝに露の西五郎のよか無かつたのを、特ニ友人か
と兼ねる木彫の鳥と共々お受けしたことある。現
在の記述の形は出く、南左、露を産の玩具は海
山輸入とんといふくつものが出たのである。皆所謂若
民藝と術と云ふべきもの。粗末をいふあるが、何となく
面白味である。おのこゝの石にも数々の形を彫つた

のもあるが、何れもともなは木彫のよかおもしろい。端西
産の較べると、兼ねる出来であるが、價は美加の二
三の割買つて来たよか五六ある。羊と小人物も二
個、木地に彩色かゝる人物を一見して露の西五郎のよ
か、彩色のあつた人物の僧侶のものもあるが、異様の形は
である。ふくると川原の何れもニス板のよか、彩色
せんである。一種四角のよかうしがあるが、案外
異彩を放つてある。お葉の序々一二を考き記すか
此の如き人のあつたおのの柳子がよく出来て
ある。すべて木地をあらにし、紅や白の毛が用へてあ
り、一面が紅と塗らんとあり、舌のけが赤く塗らつてある。
お葉の大蒲のけに、蒲葺時代の特徴がこゝにやう

ありうと云はれてゐる。此の敷地は、満洲の松林四方
 を圍み、自ら一大公園の観がある所であるが、毎年
 一千本の楓を植へて更に凡改を添へ、花卉は千
 エーリツプのふじロヤレンス、ア子モチ、クロウカス、
 牡丹芍薬のふじも、勤培し、牡丹七六千本の
 母木を植く、佛國をも移植し、このちあつて、
 四時花を咲かせる、パウタリスとして新居に来る
 各地の客を喜ばせると共に、園藝行海を乞
 まんとするの、今此の観念はと云ふ、左に案内圖を
 ぬめしおく

標原製

新潟農園案内略圖



農園穴き案内

農園の遊覽には徒歩・乗合自動車又は汽船を利用する三つの順路があります。

- 一、徒歩——萬代橋を沼垂へ渡り萬代橋通りを北へ縣營埠頭を左に見て進み末廣橋を渡つて堀割傳へに松林に入ります。此處には農園の美しい花卉類が咲き亂れて居ります。萬代橋から約三、四十分、一日の清遊には好適の道程であります。
- 二、乗合自動車——市街自動車(赤バス)沼垂終點で新湯遊覽自動車(青バス)に乗替ひ臨港鐵道踏切附近で降り松林に向ひ東へ徒歩にて三、四分、農園の入口に達します。
- 三、汽船——時報塔下或は入船町汽船發着所から渡船に乗り臨港丸終點で降りこゝから松林目掛けて東へ徒歩七、八分で農園に達します。花の農園遊覽を兼ねて新湯港の視察には絶好のコースであります。

状況を復らむるに切りの好からず、熟しむる況
 馬界の北の況を稱揚し、其の経済の著者として

あつてゐる。羅貫中「作」のうらむあつてゐる。馬琴
ハ文評著しく、藝業も企圖しつゝいかゞ遊んで果て
ざる終つた。係し自分もあつて、年時から此の青い
おつてゐる。馬琴の教訓に依るのあつた。此の青い
右の北宋三遊平妖傳と云ふもの、北宋の舞臺は諸葛
遊智馬遊、太子遊の三遊が妖人を平けた物語に
あつた。あの以て支那の迷信が盛んに行はれ、愚民を盛
惑する偽仙が横行しつゝ、まを平けたと云ふが大体
の筋であるが、明代と云つて龍子猶と云ふ人氣あつ
小説の作家が龍子猶と云ふもの、粗笨の筋を
しつゝ、その本が今流布してゐる。だが、自分の得た本
ハ依然羅貫中の譯で、譯者自らが完譯してゐると



云つてゐるが、先と角今の子はあつてゐる譯本に無
自分二日を費して讀つたが、今の探偵小説のやうな
もの、俗で、すに、獅子、驅つて先き、く、と、讀ませ
る趣向、うらむあつた。怪音が怪つてゐるが、うら
く波瀾もある、右の小説として見上げれば、羅
貫中の流石に大家である。
○端午の節句の、家園の祀の習俗も、近々伸
いて今、尺許は達してゐる。葛蒲が消毒の草と
するもので、端午の節句は、簾軒に挿んた、浴湯に入
れ、うらむ、支那の習俗を我邦にも今、あつた。あつ
てゐるが、いふいふ、あつた。あつた。あつた。あつた。
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

あるが白合の雪を試みればこゝろの寒が、葛蒲の葉
 を束ねて枕とすること、研ぎし頭を冷す効能があ
 る相違する。重玉の期節、漸やく温暖を免
 へるから、此の枕にこやくことよゝい心持であらう。
 ホツアとよふ葛葉草に今麦酒醸造の大切なる
 料とすつてみて睡眠を促す作用がある、昔し
 さんざんこの枕を以て早く此葛葉草を枕とす
 りつけと寝ると、よく寝ると云ふのが、今もさう
 である、マシナヒといふ、理窟のあること、いん
 だが葛蒲枕も或は同じ作用があるのかも知ら
 ない。

○酒の振脚の意を束ねて軒頭を吊すこと



葛葉草の枕

○江戸時代東京や其他の地方から出て来た目こ附いれ
このときから多くは江戸特産のもの、左もさくは他とよ
りちちくまのいよ、まぢぶへきこよ、厭ふべきよ、多
くは市井に属し、たよか、今の今くさういよもあるが、
おとまんのち、さうさもある。これを江戸の名物と云へん
は江戸の答へてよのよが、穿ちる多し位だ

火事 消防(火けし) 喧嘩 文身

祭礼(祭り揚句娘をさす) 初糰



洗湯(朝湯) 踏車 女の華羽織(男は女の着る)

馬鹿ばやし 夜鷹 芝ば 辻清浄

辻考色 夜店の主合 月代の竹久入

いぬ糊、卸屋 日濟借(烏金) かつ節のなま

あて、まえこ菜 釣 織紋のしめ

襦袢 川合 子子取 小便んき

こまけいよ よいい 〇(子)番の商い

四ツ目(長) 錦伶(地) 大名の武鑑

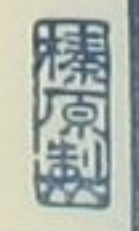
麦湯 焼芋 鱧 天ぷら

大福茶 つけね 乾海苔 糰粉并笹田工

武家出巾の代巻 狂歌 犬の糞 子規

仕送用人(貴族家の家計を弁する者) 新酒の酒籠

田河開き 車のひき勢 鳥籠屋のひき勢
 寒中の裸参り 釣鐘の出来合 鬼灯賣
 寄席 協夫 船名 水賣り 坊主のひき
 木遣節 度序 酒指の曲持 徳市
 始末屋無銭お魚 人相見 賣ト 素人茶番
 吉原の燈籠 団田子改の菊細工 入谷の相見
 亀戸の花 道取の泥濘 酔倒
 版木屋 札差と通巻 邦間 屋根船
 大名の抱相撲 ちまの切火 勘當 元脚
 雲伏 徳嫁 羽子板市 べつ々市
 大とりさま 十軒店羅市 魚市
 城入前の大名奉公 山車と躍り屋台 潮干狩



寺小僧 湯屋の師匠 鳶職 石尊洗垢羅
 蛭子海 初午と福多 煤掃
 軽のおき流し 東叡山の金貸し強制

数くまんかまのいくらもあつてさう、すま江川に限つてよ
 びまいよも交つてあつた、ちかちか地不なあるもの、江川のま
 特徴がある、鉄湯や風呂も江川の朝湯からある。月代
 の變入ハ從沿河が月花うらもの、せむをゆるいんまとい
 く返らませるの、月代をゆるいん、其病のあつた、
 いの糊の節、江戸の如き大都、ちかちかけん、
 とである、鐘一ツ、まねぬ、日のあつた江川、釣鐘の出来
 合、ちかちか、燈籠のひき、賣りの、ちかちか、菜も

の取つれも、向崎飛鳥山の御嶽と燈いれも、固子坂
の為人形や入み、和泉の御嶽と燈いれも、固子坂
やり板が無かつれからある。井戸の町人の御嶽を擔ぐ
ものか多く、南をあると祈る、此所の御嶽と燈いれも、固子坂
中行事の蛭子の神が盛んに行へ、既鳥神社の鯉子
ホは今もあるとしてある。大衆向飲食の昔はから
海上登達し今も高きくある、いくく鯉の子の神と燈いれも、固子坂
天鼓の神と燈いれも、固子坂
焼芋。米化してある、いくく鯉の子の神と燈いれも、固子坂
此所の名は、冬鳥の大名、いくく鯉の子の神と燈いれも、固子坂
生じれ、いくく鯉の子の神と燈いれも、固子坂
目上のやう、舟の乗りを、いくく鯉の子の神と燈いれも、固子坂

の象谷は後世の名工に比し、自ら高松に在りて其の技巧の如何に感し
 陳列今があるて、少くも其の技巧の如何に感し
 此の地人の関心を、甚しく興起せしむるに、其の如何に感し
 の書畫は、其の如何に感し、其の如何に感し、其の如何に感し
 其の如何に感し、其の如何に感し、其の如何に感し、其の如何に感し

玉楮象谷翁

附印章字法に就て

赤松景福

玉楮象谷翁歿後本年は六十五年なり。讃岐人翁を漆聖兼彫
 聖と仰ぎて追慕し、過ぎし二月二十三日を期して、高松市工
 藝協會が主催となり、縣公會堂に於て翁の銅像を置き慰靈祭
 を執行し、二十三日二十四日栗林公園内縣商品陳列所に、遺
 作品の展覽會を開きたり。翁の遺作幾百點は全國に散布して、
 歲月を経ると共に益珍賞せられたるが、此度展覽會に出品せ
 られたる者は、松平家を始め、各所藏家より集まる所百有餘
 點の逸品あり。其中堆朱の鼓箱、忌貝の香盒、手向山堆黒
 の香盒、黒毛彫料紙箱、木地彫蘭の都盛盆、存清印籠、鎌倉
 彫料紙硯箱、木地三清圖大丸盆、堆黒澤瀉の香盒、蒟醬料紙
 箱、堆朱黃蜀葵菓子器、利休木像、乾漆印材など畢くは記さ
 ず、何れも觀者をして感賞措かざらしむ。

翁は文化三年十月四日の生れなり、六十四歳を以て明治二
 年二月一日歿す。宅は高松市外磨屋町藤森荒神社の東なり。
 本姓は藤川、名は爲參、字は子成、通稱敬造といふ。象谷は
 其號なり。琴平山舊名象頭山といひしに取る、其家世々刀鞘
 を塗り且漆を賣る。翁に至りて天才彫刻を善くし、運刀の妙
 古雅にして漢人と辨別し難き程なり。其製支那の張成存清等
 の手法を摸し、本邦古代の製に基き、竹籃又木材を骨格とし、
 これに種々の彩漆を加へ、其彫刻したる模様を填め、其光彩

翁は天保元年高松藩主松平頼恕に仕へ、又次の主頼胤頼聰
 にも仕へ、其間に御用品として凡三百餘を作りて納めたり。

其中最も技巧精妙の譽を得たるは天保十年、翁がまだ三十四
 歳の時頼恕に獻せし者、即ち象牙の小印籠に荷葉五十五、荷
 花三十、大湖石二、龜三百四十三、蟹四百三十二、蛙四十、
 蝸牛二十七、蜻蛉二十四、蝶二十六、玉蟲二、蠅九、蜂四、
 蜘蛛十八、蜈蚣五、雀十九、鷺七、翡翠十、鶺鴒一、鶯三、
 蟋蟀二、蚱蜢四、菴四、螳螂四、蝶五、兜蟲一など合計千八
 十六個の物象、各飛動起伏沈浮の姿勢を具へ、其中に僅に芥
 子粒の大なる物も分明に之を彫刻し得たり。藩主嘆賞の餘り
 帯刀を許して扶持を給與せられたり、然して右の至精至密の
 作品は僅々十數日間になれりとは驚く外なし。翁は又堆朱堆
 黒に妙を得たりといふによりて、其後頼胤の命に應じて堆朱
 の鼓箱を作りしが、是又絶妙品として稱せられ、之に依りて
 土籍に列せられたりといふ。

翁の性質は豪宕磊落にて名利には淡然たり、常に古器物書
 畫を好み、讃岐にては宮本敬哉、阿部絹洲、山田梅村等と交
 り、京坂にては永樂保全、僧雲華、貫名海屋、阿部絹洲、篠
 崎小竹等と交はる。故に文學趣味を自然に會得せり、其中に
 も永樂保全は蓋し其家十一代にて支那古陶器を研究して作品
 も名あり。翁は保全に交はりそれより傳得せし由にて、時に
 は陶器をも造りし事あり。これを象谷の『フイゴ焼』と稱し
 て鑑賞家にもてはやされたり。

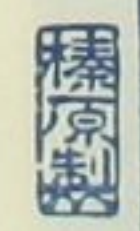
さんカーするの地位を居る。この年輩は自分と曰年位
どあうか、何と縁因の人は、保元今してあふの因と
受くは

五月四日記

○昨夜が業作と新を合つて開いた文の協会の特程
詳談の大花者、評議場の、その後接があつて開会する
か、結果の協会の、外多敷外界から、師匠の、
三万の大敷を、えう、この、自人が大花者、あふ、
この、説を、受へて、感した、ことを、えう、いつ、
日、海濱の、毒い、油を、と、陳べ、主、
所、
子、
へ、
標

幹と枯す、恐い、がある。全体大衆金融の、
海り、殊に、無産の、
え、
出、
要、
者、
此、
云、
其、
由、
銀、
ま、

数の多きを誇ることを云ふが、斯く云ふのは銀行の庶民に對して何人の役にも立たない。日本の経済の多くは金を少く積むに在りて、取早く多くの利子を収めんと欲するが、確實に金を蓄積し得るから、兎論之故困難に危殆にありし所も及ばない。保陰令社を以て云くは、尤も保陰を爲すにすべしとの金持の心算、空手無銭の會者なる西洋の保陰令社も、鐘を鳴して貧民を救ふに主入り街頭募金をするところか、日本に云へば、而して五零碎の入口を寄せて集めよう。而して一奉或十萬の應募を得れば有利と云ふ方々の心算するの心算と保陰を要する方面に活潑する積む仕業である。地方の農村の金持も、及ばぬが、銀行の口口



地方の考めざる便利なる金融機関であるが、セこそ云ふが、又他の戦々大なる銀行と合併して、傾向がある。この大元現物の貸出しが、多き利少き為めであるが、他の銀行と合併すると、貸出しが、重なり、庶民の利益の遠いところである。産業家の為めの特種銀行もあるが、この七貸出しは、金融的が、ついで、産業家を名として借り出すものが多いため、勿論庶民金融の働きは、庶民や小工業業者との無縁の所である。何んと言ふても、一からあるの視察の雙層がある。庶民の取らん大切金を、取らん簡単であるから、一窮するところまで、取らんか、と云ふも、一からある、頼母子講、與共

法洋風を味まて人好く多致味りて日本の善の石を
採ること久しく、名石の千里を辞せざる必く多畫す、此
物より所 百石の多々なる心、一々其名と其産地を
注す、卷の首尾に法家の題跋あり、乃ち序に、
中村漱栲亭主君、山陽の文あり跋に、
望之、唐、藤原の井、小宮山昌宗の、玄覽、英、
主人の文あり、一節、拓本をんも、拓法他と曰い、
かゝる、法家の序跋皆拓法を稱す、蓋し其の拓檀山
獨創の三風と依り、形、名、の序と云々

(前是) 其巧全此梨棗之所勝、亦非金石之所
鏤也、木林有雜十字工于圖書、似別有一手、
也、馬、其法先以膠泥為板、而窑燒之、然後和澄

泥以描寫其板、再燒之、成而搨之、是、其所以不
失其真而善、俾、鬱、鬱、鬱、在古色也、

山陽の序も又云々

山人好畫、最喜狀石、行、海、内、起、音、俾、醜、恠、者
輒、搨、之、其、篆、之、也、以、土、代、紙、以、泥、畫、之、而、窑
之、而、搨、之、僅、如、搨、金、石、湯、文、者、而、石、之、貌、神、并
其、紋、理、斂、斂、莫、不、皆、肖、云々

高時此拓法を音とて、法家の一齊稱揚す、所
を推し得る、卒然と此帖を見んば、瓦吹に似たり
ものあり、而して然らば、余先年極山が曰く、拓法
を、自家の画に、搨、し、る、も、二、枚、を、得、て、今、も、存、す、
或人云く、此漆喰板を、予始め、序、文、に、就、し

其知本校の大意を知り得たり。石の神をあらはすは是
しち南の法も知らず日本も素國石謬に對抗
し得べき石謬なく、唯これ石謬の比しと好むも
るまきを其の書体跡本らうと主張して廿五回を
徴す

五月四日記

○津田仙が麻布新橋河を其居社を住居しとめれば
ハ自分の書生時代でふらふ面合しとがある。津田が
明治の初年、新橋に評官とて来りては、こととあるの
で、津田氏も今も此時、新橋時代の懐かさを言へば
中々、新橋を引上げれば、津田の軍が攻め入つれば、死
の跡でゐる。よも取りあへず、道に出しければ、三年も死
さしてから、新橋の銘茶屋の主人から為物の偽り



のも見ると、時を適宜に感念する。其の意を察し、そのむちあつて、無
くもつ仕舞つたとおもふ。これよもか悪く連し、これのむちあつて、
税人が、えい、今も銘茶屋の厚意と出れば、よもか、銘茶屋
の争乱の際、一時津田の為物を一統して行形、其のあ
るあつた、砂山と埋めて、隠し、置き、事、平ら、い、後、
四重、二、戻し、これのむちあつて、か、分つて、と、云、お、話、津、田、よ、
も、ま、ま、赤、新、橋、よ、も、此、話、が、残、つ、て、ゐ、る。仙、氏、の、子、息、心、和
田、姓、を、名、乗、つ、て、ゐ、る、純、と、云、ふ、人、が、早、稲、田、出、身、の、往、年
の、新、橋、の、格、部、長、と、し、て、在、任、し、た、こ、と、が、あ、る。そ、ん、な、縁
故、で、あ、る、時、君、の、國、新、橋、の、縁、故、の、あ、る、の、は、君、の、父、君、か
ら、い、と、云、ふ、前、述、の、こ、と、を、自、身、か、ら、話、つ、て、い、た、こ、と、が、あ、る。
昨、日、仙、氏、來、訪、の、時、數、語、の、父、の、書、齋、を、拵、つ、て、未、也

政西の産業を日勝してあからの留候を得る事と云ふは
といこの才二次の洋行中であつたといふ、津田が著書三書
と云ふ書と著わいし、津田の工風をしり、西洋の
街村を日本に移植ししもの、時ヲリストリヤ街役
を兄と彼の事業であつた、新地時代の女子を死する
学校もあつた、●まゝの移植は、農林校へ移つた、
校とあつたが、●創始の産業を校へ津田の任官に俾り、
間接には産業施設も又斯界の施設の元祖があ
らう。自分いろいろの事を聴き、今の内生を考へ、
考の事款と交き、集の信を此へしと得通しとあ
んれり、●昨日の記

○檀山人の石講を得し山陽の序を得り、此文山陽の文集



の扱めあるや未だ採り、或人送又と云ふし思ふに
全文に抄す、予の寄る山陽の逸文を採集し、意ある
故也、此文恐く山陽の多く思惟を考へ、心をも
と思へども、流石に山陽を思ふ不あり、天を以て
天を撰すと云ふ不あり

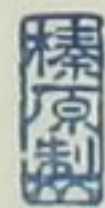
五月五日の記

石に有講、意矣、檀山人之講を得るに天馬
山人好畫、意を古状に、行海内、觀之、偉麗怪
者、輒撰之、其纂之也、以土代紙、以泥名之、
而空之、而標之、儼如榻、金石、陽文者、而石之
顔神、并其紋、理、斂、斂、莫不皆有、未請余
序、余聞而歎曰、山人之手、亦造化、夫
石亦此泥之聚形者、邪、而使之聚形者、陰陽

陶治也乃欲以區々之志正其法筆墨則斯
以難矣必刻之杖去其念遠以人之摸石
雖其初亦未免用心乎然及泥之与火相持
凝形痕迹融化自有去意外者比之筆墨
梨棗之終始人為則大有途庭矣故世之
謬石以人摸天而山人之謬石以文墨乎天使
石文有印則其跡點頰至如其在此不在
彼也之為序

文化十二載寅次甲戌秋七月山陽の
頼重衣撰并書□□

○檀山不語の竹休坊の竹の頭山人の美鬢を傳ふ。而時武
成の匡僧を著る然るも山人の美鬢のいさ公許と得



ハトリとよの坊也

下毛檀木林高小史の從其君屋未成改改金得一
逢其人七十左右善画鬢長數尺髮然妙銀云々
近の且少髮以志為鬢駭衆目昔之六の坊乃
夫法相宜官特許の一人振鬢出入城の他不
得以為例此亦古之奇而不凡者云々

ちか宮山岩木の頭の竹の檀山常のつるのく、在る
史記、香魚を畫す之んを捲源に掲げけり云々
狐の真の魚と云ふ之んを觀へりと云々皆傳を補
外資と云つべし

詳しく書いたところがある。伊太利の「家」に
この古い歌を引く。お、家よ、なんぢ、
とよよせうらゝとよよあゝ。波蘭の「家」は
蘭の國家の關係に就て書きまわす。さうが波
蘭である。その國のありから、何れも國家とい
ふこと、持つて来るけん、人が年を何けるか、そ
の時福し、家語の序文」といふを、六
頁の大きな書物がある。序文にけん、六
せん、各國民の事を現したよと、誰か
いふ、とよよあゝ、お、家よ、なんぢ、
いはれ、とよよあゝ、お、家よ、なんぢ、
いふ、とよよあゝ、お、家よ、なんぢ、

○名古屋の國者領大令に就て進次汽車中りてん



名古屋に就ていふ、進次と申す、
が市大に在りて、名山塔寺と申す、
の途中、名古屋に主客の時、
時、田舎の海と、水田、
宅の、野、に在りて、今、
城内、海、内、に在り、
頼、かつ、この家、に、
く、この人、を、付、
追、懐、を、経、
口の、姓、と、
理、の、
今、七、

今更なる城守が無つれば、頼まず事、件、隆堂から尾尾
和山の祝祭、自合と外二人の代、流をせん、時、久
方振目、目、口、今、口、尾の鏡、素、不、技
師をやつて、み、此、い、あるが、今、名、佐、左、か、不、久、く、清
忠を、信、つて、ある。其、此、の名、七、左、の、言、美、の、例、の、ナ、ン、ジ
ヤ、モ、ソ、ジ、ヤ、イ、モ、ス、カ、リ、ラ、ン、ラ、キ、ヤ、セ、と、云、ふ、奴、が、
宿屋の下女の言美の解らざるの、困らせ、え、れ。
よ、ん、か、ら、後、い、な、り、出、し、け、れ、大、隈、左、左、と、處、從、し、れ、時
ハ、半、獨、大、河、の、真、福、寺、を、記、し、て、その、花、虫、の、一、部、を
見、れ、こ、も、あ、る、が、その、際、の、四、寶、持、世、の、こ、の、い、つ、子
車、馬、に、貸、出、し、て、あ、つ、て、一、つ、も、な、い、こ、と、出、来、さ、う、つ、れ、か、
こ、の、大、合、を、い、な、名、古、屋、の、同、者、領、こ、も、い、と、陳、列、さ、る、こ



と、ま、ら、う、し、あ、る、の、い、え、今、度、現、が、出、来、つ、い、あ、ら、う。井上
辰太郎が日本丸りの名古屋の支店、日、長、で、あ、つ、れ、時
七、何、の、の、用、び、名、古、屋、に、出、張、し、れ、る。その、際、井上、の、藥、四
て、ある、酒、樽、に、お、い、え、ん、れ、か、井上、の、ま、よ、ま、い、毎、日、く、い、ま、合
か、續、く、の、い、や、ん、自、合、の、度、ん、と、あ、る。何、も、蚊、も、よ、ん、と、君、の
為、さ、る、任、か、さ、る、か、僕、の、生、命、さ、る、君、の、手、に、ま、さ、る、を
を、呼、ん、び、手、に、ま、さ、る、と、い、ふ、い、い、ま、い、特、あ、ら、う、か、れ
いと、日、の、真、實、の、敬、敬、の、手、の、こ、と、を、し、れ、こ、と、を
思、ひ、出、さ、る、ま、い、か、ら、は、あ、か、文、の、協、合、を、和、し、様、式、の、決
刺、を、や、り、出、し、れ、時、マ、グ、ダ、の、芝、居、を、名、古、屋、に、や
る、と、ま、よ、の、い、自、合、も、ま、い、合、に、同、僚、か、あ、つ、れ、い、ま、は、あ
と、向、行、し、れ、る。その、際、名、古、屋、の、市、長、ハ、永、井、首、角、の、

集出

昭和八年五月發行

ヨ | ヨ |

三 村 清 三 郎



もう少し氣を付けたらば、或は支那の書物からも、見出されさうに思はるゝなり。此も古くより西洋にありしものにて、近頃又はやり出せしが、吾邦に傳はりしなど言ひなされ、童はもとより、ひげくひそらせし大人まで、もてあそべるめれど、實は吾邦にてもつゝ此間まで行はれし手遊にて、予が知れるは土製なり、殊によらば晴風ぬしのうなゐの友などにも出でつらめ、今の木製のものよりは、引きこたへありて、やりよかりしやうに覺ゆ、土瓶の蓋にても、かゝる戲せしといふ人もあり。ものに記されたるにて世によく知れわたれるは、近世騎人傳卷の三に、手車の翁として、これを賣れる翁の記事あり、享保の初、京にて手車といふものを賣る翁あり。糸もてまはして、是は誰がのちやと

いへば、これはおれがのちやと答へて童部買ひて翫ぶ。されば此の人いで來れば、童部集ひて喜ぶ事なりし。後はまた難波に往きて、賣る事京のごとくして、終にとある家の軒に端坐して死す、傍に小さき卒都婆を建て、小車のめぐりくゝて今こゝにたてたるそと婆

と書きつけたり。いかなと、その時を知る人語りと、此の騎人傳を引きて、嬉遊笑

これは土にて小さく井戸く
絲を卷付て、絲の端を持
れを上にするこしやくれ
いつ迄も舞ふ、今もある

とあり。又守貞漫稿第三十三
守貞幼年の頃、京坂にて
製にして、白粉をぬり、
端を持って、聊か上下の意
と記さる。予が知れる頃のも
り、東京にては何と呼びたり
二色廿二丁オには、かはり屏

同じく表に菊花の畫あり。質に
むねに火のかくれ屏風もほにいてぬ加茂のむかしの車あらそひ



これはおれかのちや
る人の世を翫びてかかりけむ
ぬ。
覽に

るまの如く作り、絲を結付、其
てつるし下ぐれば廻るなり、そ
ば、絲おのづから車にから卷て
なり。

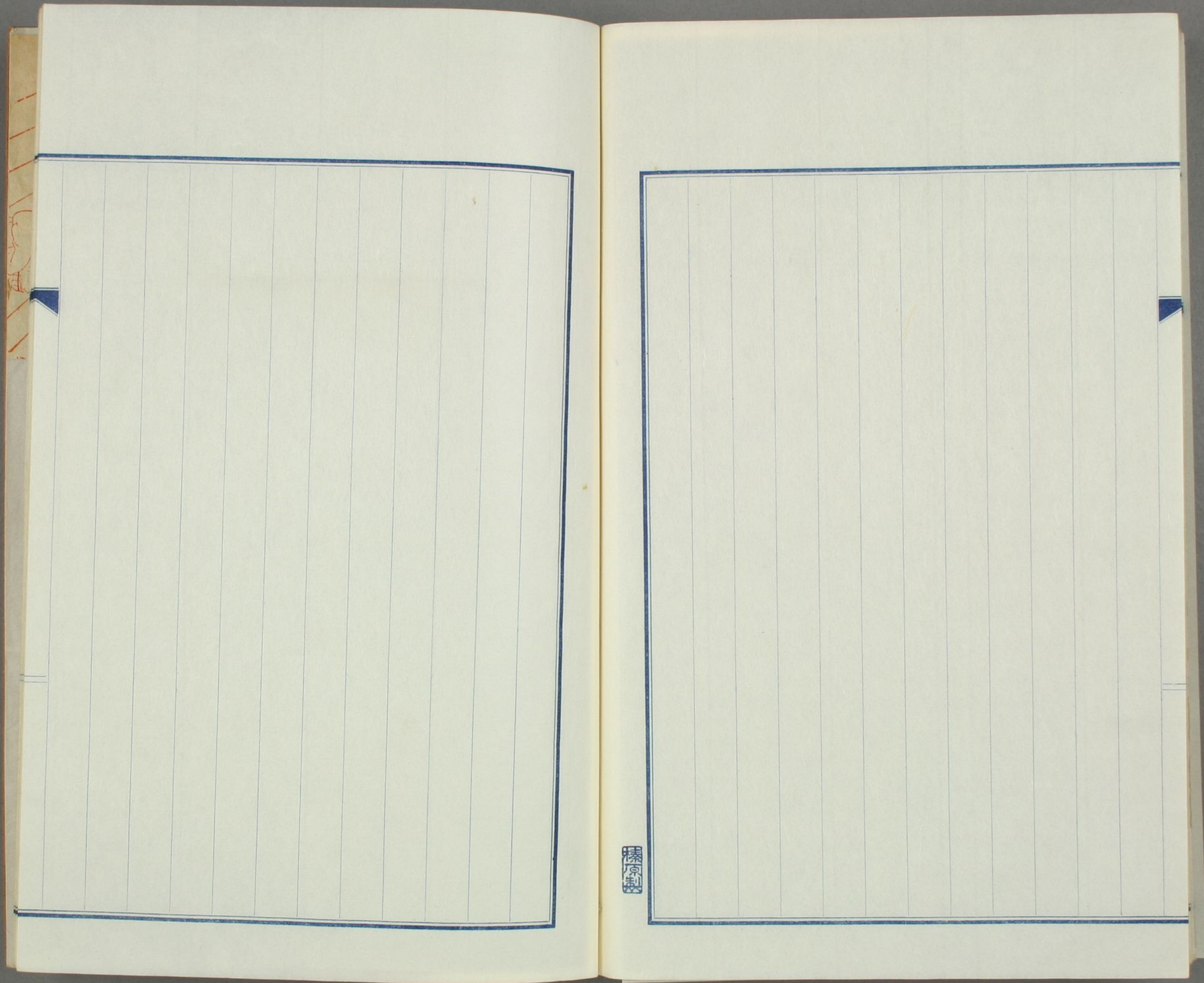
編追補に、阿蝶殿の輦として、
賣之者あり、其形は菊花形の土
周り凹なる所に緒を繞ひ、其緒
を爲ば、車速に上下す。

のも、表に花の形を型押しした
や忘れたれど、安永二年刊江戸
風スウ車と共に畫かれて、

咩神社にありて、其の傳來に就ては早く嘉永元年
に森田良見(栢園)の考証ありて、その考証に
を得て是も、此の神社の神主は建部伊織北麿と
云はん、栢園の考証を援はん、元と西神社より上道
氏にありたるものが、其家傳にて建部氏に傳れたるもの
ありとある。此原本の答答に永享十年の事と
あることが記してある。新居が此者を著したるを
延元四年とし、延元元年の事、新居の家
傳にありし事實がある。永享十年の八十二年後、
あんども、毎年、新居のハウキリしてある
の白山本のありるも、あつた者も後人がいろく
書き傳れたるものもあつた、北朝方の事、北朝の



天子の事蹟を卷尾に記し、その事蹟を
悉く中にも古態を伝へ、其の事蹟に
關するものあり、



Faint red handwriting on the left edge of the left page.



以下
12丁
白紙

